

論文

老兵文学における家族表象

——履彊と張大春の比較を中心に——

倉本 知明*

1. 老兵とは誰か

台湾において老兵とはいったいいかなる存在であるのだろうか。この問題を考えるにあたって、大日本帝国の崩壊から説き起こすことはあながち見当違いではないはずだ。周知のように大日本帝国の崩壊はその創設と同様、東アジアに巨大な人口移動のうねりを巻き起こすこととなった。その崩壊に伴い、当時の総人口の一割近くにあたる660万人もの人々が外地と呼ばれた帝国の周縁部から日本を目指して引き揚げを始め、また多くの外地籍の人々が内地と呼ばれた帝国の中心から光復したばかりの「祖国」へ向かって移動を開始していた。当然、帝国の南進基地と呼ばれた台湾もまたそのようなうねりの渦中にあった。50万人近い「日僑」と呼ばれるかつての内地人たちの引き揚げと入れ替わるように、南洋からは皇軍へと「志願」した台湾籍日本兵たちが、また大陸からは抗日戦争に勝利を取めた陳儀を代表とする国民党の接収委員たちが台湾を目指して移動を開始していた。

しかし台湾海峡における人口移動が最も巨大なうねりを見せたのは1949年以降、大陸での内戦の敗色が濃厚となり始めた国民党政府が首都を南京から台北へと遷し、それに伴って200万人とも言われる大陸から台湾への未曾有の大移動が始まってからのことだった。渡台者たちの構成員は様々で、公務員や官吏、それに教師や学生など多様であったが、その中核をなしたのは60万人にもものぼる軍人たちであった¹。一般に台湾において老兵といえ、この時期に国民党に付き従って大陸から台湾へと渡ってきた軍人たちのことを指し、先に述べたような皇軍に従軍にしていた台湾人日本兵たちを指す場合は特別に「日籍老兵」と呼ぶことが多い。

北伐戦争に八年抗日、また国共内戦と南征北討を繰り返してきた「愛国戦士」たちが故郷への帰還をその胸に誓って台湾へと渡る様子は、周婉窈の指摘するように確かにある意味では壮大な叙事詩的な要素を含んでいた。それは「浪漫主義の詩人ならば、大いに称うべき、はたまた嘆くべき史実を謳い上げるに違いない」²のものであったが、その「愛国戦士」たちの内実を見れば、大陸各地で強制徴用されてきた貧しい農村出身者たちが大半を占めていることは明らかであった。

この件に関して、笹川裕史は戦時期における国民党政府の徴兵制度が日本におけるそのように十全に機能していなかった事を指摘し、その機能不全を覆い隠すように当時国民党支配地域の多くで保甲長などによる計画的な壮丁拉致が行われていた事実を明らかにしている³。当時の壮丁拉致の対象者は主に権力的な後ろ盾を持たない貧者やよそ者に限定されており、1943年10月から始まった知識青年従軍運動によって軍に入隊した一部の学生や知識人を除いて、兵士たちの大半は自らの意思に反して軍への従軍を余儀なくされていたといえる。その後の内戦の激化に伴い、豈図らんや、実に60万もの兵士たちが台湾海峡を渡り、40年近い故郷との強制的別離を余儀なくされることとなったのだ。

それでは、この60万もの離散者を生み出すこととなった壮丁拉致の実態とはいったいいかなるものであったのだろうか。江蘇省に籍を持つ外省人の二世作家、曉風(1941年～)の作品に、『一千二百三十點(一千二百三十針)』(1996)

キーワード：老兵文学、家族、離散、履彊、張大春

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2005年度入学 共生領域

という短編小説がある。老兵である唐大勝は大陸への親族訪問が解禁になったにもかかわらず、大陸の親族に会いに行くことが出来ずにひどく陰鬱とした日々を送っている。その理由は、かつて人民解放軍の兵士として朝鮮戦争に参戦し、アメリカ軍の捕虜となった際に彼の身体中に彫られた「殺朱抜毛」や「反共抗俄（ソ）」といった無数の刺青の存在が彼を大陸の故郷へと帰ることに二の足を踏ませているせいだった。老人ホームにいるかつての老兵仲間、王正福と病院に刺青を削りに行った唐大勝は、なぜかその時にふと自分が兵隊になった時のことを思い出してしまうのだった。

王正福はまだ来なかった。唐大勝はすっかり座り疲れてしまい、立って身体を動かしてみたが、とても遠くまでは行く気にはならなかった。なぜだか分からないが、彼はその時、ふとある歌を四川言葉で口ずさみ始めたのだった。

老いぼれでもいいさ、ガキでもかまわない

老いぼれでもガキでもなけりゃ、さらにいい

歌い終ると彼は思わず笑ってしまった。なぜだろう、彼は40年も昔の兵隊狩りの歌を思い出していたのだ。所謂老いぼれとは4、50歳の、ガキとは13、4歳の子供たちを指していた。あの時、彼はまだ23歳になったばかりだった。まさに老いぼれでもガキでもない妙齢だった。これで兵隊狩りにあわないわけがあるうか⁴。

また、履彊（1953年～）は少年期より軍に入隊した経歴を持つために、本省人子弟でありながらたびたび老兵をそのテーマとしてとりあげてきた稀有な作家であるが、その履彊の作品に『信（手紙）』（1989）という短編小説がある⁵。ある日、友人のMに誘われて国立公園の浜辺を散策していた「私」は、士官長と呼ばれるある老年の管理人を紹介される。この士官長はかつて12歳の頃、遼寧省の故郷で野良作業を終えて家へと帰る道すがらに灰色の服を着た兵士たちに連れ去られてしまい、それ以来故郷からの離散を余儀なくされてしまった老兵なのだという。戦乱と流氓に満ちた半生の中で、自身の名前さえも忘れてしまった士官長が唯一覚えているのは、ただ故郷の村にあったという二本のアオギリの木だけ。Mはそんな士官長に届くはずのない手紙を届け続け、文盲であるはずの士官長はそれをニセモノだと知りつつも、その手紙を日々の糧に郷愁に満ちた日々を送っている。

唐大勝や士官長のような老兵たちにとって、従軍は当時の知識青年層に見られたような愛国心の発揚でも、また当局の喧伝するような「反共義士」たちによる積極的従軍でもなかった。従軍はあくまで不可抗力的なものであり、抗日戦争から国共内戦、そして冷戦へと至る戦乱の中で生まれてきた一種の流氓状態であった。

もちろんこの流氓の時期についても一様ではない。唐大勝のような朝鮮戦争から従軍を開始した「新兵」から、抗日戦争に国共内戦、果ては北伐戦争にまで遡る時期から従軍してきた「古参兵」まで、その従軍時期は一様ではない。「革命尚未成功（革命未だ成らず）」という国父孫文の遺志を継ぎ、1926年より開始された北伐戦争から、1953年の朝鮮動乱の終結に到るまで、老兵たちの流氓の時期は実に四半世紀にわたる中国社会の動乱と軌を一にしており、「老兵」と一言で言ってもそのイメージは決して一通りのものではない。彼らの出身地、使用言語、また学歴や社会経験などはまさに多岐に渡っており、老兵とはまさに巨大な近代中国史の縮図であるといってもよいだろう。

2. 老兵文学とは何か

それでは、こうした近代中国史の縮図とも言うべき老兵たちを描いた老兵文学とはいったいいかなる文学であったのだろうか？

この件について許俊雅は、老兵文学における「望郷」というテーマが常に「流氓」や「漂泊」といった観念と表裏一体の関係性をもってきたとし、その理由を戦争によって引き起こされた老兵たちの流氓状態が台湾という見知らぬ土地で暮らさざるを得なかった彼ら老兵たちの心により強い望郷の念を引き起こしたとしつつ、その望郷の念によって生まれた「家」（故郷）という強烈的な観念が後に老兵たちの社会意識を形成してきたと述べている⁶。

許俊雅のこうした言を見ても明らかなように、老兵文学が一種の離散文学であることは間違いないだろう。しか

しそれはいったいつ、誰によって書かれ、また何を問題としてきた文学なのであろうか。

まずその時期に関して、彭瑞金は老兵文学の起点を1980年代における台湾文壇の多元化以降であると定義している。そして老兵たちの存在が作家たちの注目を集めた要因を、彭瑞金は、「世帯を持たずに年老い、頼みとするよすがもなく、生活に困窮する」「老兵の世界は世にも珍しい奇観を呈しており、触れると鮮血のほとばしりそうな痛々しい社会問題が作家たちの深い同情を引き起こした」⁷ためだと説明している。

当時こうした老兵が引き起こした「世にも珍しい奇観」の一つとして、1982年にある一人の孤独な老兵が引き起こした銀行強盗事件があげられるだろう。李師科事件と呼ばれるこの事件において、山東省出身の老兵であり、また抗日戦争にも従軍した経験のある老兵李師科は、「現実と社会への不満」から台北市内にあった銀行への強盗を敢行し、実に530万元以上の現金を強奪し逃走した。親しい親族もおらず、タクシー運転手として日々の生計を立てる李師科は、奪った現金を知り合いの女性と溺愛していた隣家の娘の養育費のために使おうとしていたという。しかし結局その犯行の杜撰さから後に警察に逮捕された李師科は、犯行からわずか一ヶ月後に銃殺刑に処されることとなってしまった。

この悲壮な出来事は後に多くの作家たちの関心と同情を呼び、1988年には作家苦荬（1955年～）によって『柯思里伯伯（柯思里おじさん）』の名で小説化もされている。李師科（りい・すうこお）の名を反転させた老兵、柯思里（こお・すうりい）を主人公とした本作品において、苦荬は「思里とはつまり里（故郷）を思うという意味なんだ」と、犯行の背後に「家」を失った老兵たちの孤独があったことを匂わせている。

しかしながらこうした同情を引き起こした作家たちは主に老兵たちの後裔にあたる外省人二世世代の作家たちであって、このような老兵たちの「奇観」が台湾社会全体の注目と同情を集めたとは言い難い。そのことは2004年に齊邦媛、王徳威の両名によって編集された老兵文学選集『最後の黃埔 老兵與離散的故事（最後の黃埔 老兵と離散の物語）』において収録された13名の作家たちのうち、実に12名までが外省人二世作家であったことから窺えるだろう⁸。

1980年代、李師科事件におけるような老兵たちの「奇観」が社会の表面に滲み出し始めた時期に外省人二世世代の作家たちを中心に描かれ始めたこの老兵文学は、主に老兵の孤独や貧窮、あるいは流氓や戦争の記憶、それに家族との邂逅とその崩壊など実に様々なテーマを描き続けてきた。しかしその中でも最も作家たちの筆を横溢に走らせ、またその舌を熱く湿らせ続けてきたのは、苦荬が『柯思里おじさん』で言及したような老兵たちの故郷、あるいは家族やその不在といった問題であったといえる。それは言い換えれば、老兵たちの異郷の地における家族形成といったものが、常に老兵文学にとっての脊椎のような役割を果たしてきたことを示しているともいえる⁹。

それでは老兵たちの婚姻、あるいは家族形成とはいったいどのようなものであったのだろうか。1960年代以降、台湾海峡における冷戦体制が固定化し、戦時状態が「安定化」されていく中で、「大陸反攻」というかつての政治スローガンは徐々にその現実味を失い始めていた。そうした海峡の「安定化」に伴い、少なからぬ老兵たちが大陸の家族を諦め、落地生根を志し始めたのだった。彼らは現地の女性（台湾人女性）を娶り、子をなし、そうして新たな家族をこの異郷の地で形成しようとしていた。

しかし親族訪問が解禁されて以降、老兵たちの身と心は、ややもすれば兩岸に存在する二つの家族の間で引き裂かれることとなってきた。そのため親族訪問の解禁に前後して、蕭颯（1953年～）の『香港親戚』（1986）や李黎（1948年～）の『春望』（1986）、あるいは履彊の『兩岸』（1988）や『老楊和他的女人（楊じいさんとその女）』（1989）など、老兵文学を描く作家たちは好んでこの老兵たちの二つの家族をそのテーマとしてとりあげ始めることとなった。

しかし大部分の老兵たちにとって、この異郷の地における家族形成はなかなかうまく進まず、しばしばある種の問題や衝突を引き起こす結果となってきた。軍からの退役後に手に職もなく、またその多くが文盲であった老兵たちは、工事現場の日雇い工夫や清掃員、タクシー運転手などといった不安定な職種によって生活の糧を得るものが多かった。また既に老境に差し掛かり、さらに台湾語のような現地の言葉を喋ることの出来ない老兵たちは、花婿として決して魅力的な存在ではなかったといえる。

こうした老兵たちの花嫁探しを取り扱った作品として、客家系外省人の二世世代の作家である彭小妍（1941年～）が描いた『客家村から来た花嫁』（1998）という短編小説がある¹⁰。「抗日戦争の時に十万青年軍の呼びかけに応え、わけも分からないまま十六で故郷をあとにした」という王おじさんは、故郷で彼を待つという許婚の小卉のために、

幾たびもあった結婚の機会を逃してしまう。しかし自らが老境に差し掛かり、ようやく故郷への帰還が絶望的だと悟った王おじさんは、「不幸には三つあるが、跡継ぎがないことが最大の不幸だ」という孟子の言葉を引用しながら、客家村から若い女性を花嫁として受け入れる。しかし桂花と呼ばれるこの花嫁は重度の知的障害者で、結婚相手を見つけられずにいた花嫁の家族たちはそれを王おじさんに隠して結婚の話を進めたのだった。

またこんな映画がある。退官後のある下級老兵の姿を描いた李祐寧監督の『老莫的第二個春天（莫じいさんの二度目の春）』（1984）という映画において、ある日大陸に残してきた妻の訃報を知った莫じいさんは、かつての戦友である常若松が若く美しい山地の女性（原住民女性）を妻として「購入」したことを知り、自らもそれまで故郷への帰還のために貯めていた貯金を崩し、年若い原住民女性玉梅を妻として迎え入れる。しかし元々寡黙であり、また親子ほども年の離れた玉梅を前に、莫じいさんは妻とコミュニケーションをうまく取ることが出来ない。玉梅の機嫌を取ろうと聞きなれぬ流行のカセット・テープをプレゼントしたり、また仕事仲間であるガス工場の若く逞しい男（本省人）に妻が奪われるのではないかとヤキモキする莫じいさんの姿は、滑稽さと同時に哀愁を感じさせた。

知的障害者である桂花にしても、原住民女性である玉梅にしても、両者はともに台湾社会の中で周縁化された存在であった。その意味で老兵たちが妻として迎えた女性たちは押し並べて皆、老兵たちと同様にマジョリティ社会に対して「世にも珍しい奇観」を示すような、あるいは示さざるを得ないような社会、経済的な弱者たちであったといえる。

以下ではこうした老兵たちの異郷の地における花嫁探し、あるいは家族形成の試みが老兵たちの生活にどのような結果をもたらしたか、また作家たちがそれを如何に描いてきたのかを考察するため、本省人作家である履彊の描いた『兩個爸爸（二人の父親）』と、二世世代の外省人作家である張大春（1957年～）の描いた『鷓鴣園』という、共に老兵たちの家族形成をテーマとしながら、その作風と描写の大いに異なる二つの作品を取上げ、両者の比較検討を行ってみたい。

3. 「家族」形成という試みとその挫折

(1) 老兵と原住民妻；履彊『兩個爸爸（二人の父親）』（1984）

帰郷を諦めた独身老兵と原住民女性の通婚といった問題は、1960年代から1980年代にかけて数多く行われ、それらは先ほど紹介した『莫じいさんの二度目の春』といった作品に見られるように、極端な異文化理解（あるいは衝突）の典型としてたびたび映画や文学作品のテーマとして取り上げられてきた。また原住民女性作家リカラツ・アウーのように、こうした老兵と原住民女性の通婚によって生まれた新しい世代の作家たちが現在では自らのアイデンティティをめぐる作品などを発表しており¹¹、老兵と原住民の通婚といった問題は老兵文学のみならず、広く人口に膾炙した社会問題となってきたといえるだろう。

しかし老兵と原住民女性という社会の中で周縁化された、あるいはされつつある両者が婚姻という形で結ばれる時、そこにはいったいどのような力関係が存在し、またそれが老兵文学の中でどのように位置づけられるべきかということに関して、日本国内はもちろん台湾においてもこれまで大きな議論はなされてはこなかった¹²。

1984年に「台湾時報」誌上に掲載された履彊の短編小説『兩個爸爸（二人の父親）』は、馬じいさんと楊じいさんと呼ばれる二人の老兵が八三玄（金門島にあった軍の官営慰安所）で娼妓をしていたという原住民女性、林春花を妻として「共有」することによって生じた様々な悲喜劇を描いている。物語は「私」と呼ばれる小学校教師の視点から語られるものの、その多くは馬じいさん、楊じいさん、林春花という三者それぞれの独白によって構成されている。同じ四川の出身であり、また同じ部隊に所属し、同じ女性を愛した馬じいさんと楊じいさんは、互いを兄弟と呼び合うほどの仲ではあるが、しかし林春花をめぐるその関係は複雑にねじれ続ける。金門島での被弾によって胸の肉が腐り、障害者となってしまった楊じいさんは、台湾本土への帰還後は馬じいさんの助けなしには日常生活もままならない状態の生活を送るが、同時に自らの妻との関係を持ち続ける馬じいさんのことをひどく憎んでもいる。

そんな楊じいさんの気持ちを知る馬じいさんであるが、異郷の地における唯一の身内である林春花との関係を断ち切ることが出来ずに苦悩し、「私」へと助けを求めてくる。

春花、あれは決して気の優しい女じゃない。でもね、あいつはわしらにとって……ああ、お若いの！ あんたには分かるまい。ある日、もしも、もしもあんたが戦災に巻き込まれて、家族との離散を余儀なくされちゃったとしたら……彼女はわしらにとって唯一の身内なんだよ。それに馬楊林、あの雑種も生まれちゃった。ははは……。

お若いの、納得できないって顔してるな。あんたはわしらを滑稽だと思ukai? ¹³

馬じいさんが「私」に助けを求めるように、楊じいさんもまた「私」に自らの心に巣食う馬じいさんへの殺意を伝えた後、告解するように「私」にこう告げる。

俺はあいつを恨んじやないさ。

なんたって俺は役立たずだ。

もうこれ以上、俺は兄弟のあの不安に満ちた顔を見るのが耐えられないんだ。あの後悔と疚しさに満ちた顔を。それに春花のあの淫売みたいな獣のような眼差しも。もし俺に銃があれば、俺は心臓に正確に標準を合わせてやるのに。へっ！ 迅速かつ確実に、美しくこの任務を完遂してみせるのに。ああ、先生！ 苦しいよ！ 苦しくて、苦しくて、苦しくて……ゴホッ、ゴホッ……。チクショウ！ 傷が疼きやがる。こいつは俺をちっとも安心させちゃくれないんだ。¹⁴

流氓を続ける生活を送ってきた馬じいさんは、異郷の地で唯一の「身内」となった林春花と離れることが出来ず、楊じいさんもそんな馬じいさんの気持ちを察して障害者となってしまった自身の不運を呪い、もがき苦しみながらもなんとか歪なこの「家族」を維持していこうとする。「馬」じいさん、「楊」じいさん、「林」春花のそれぞれの姓を一字ずつ取った「小雑種」の息子、馬楊林も加え、彼らは「路傍に生い茂る草木よりも多くの風評を村人たちの間に引き起こし」ながらも、なんとかその「家族」を維持しようとする。親子ほども年の離れた林春花にベッドの中で「ママ、ママ」と泣き叫ぶ二人の老兵たちは、こうして離散によって奪われた家族の代替を林春花の中に求めようとするのだった。

しかし一方、この二人の老兵が失った「家族」への補填として八三幺から「購入」されてきた林春花の視点から見れば、両者の持つ望郷心や家族への渴望といったものは全く違った形となって現れてくる。二人の老兵の間でゴム鞠のように翻弄され続ける林春花の乳房は老兵たちによって散々に噛み千切られ、身体中には鞭でできた痣や鬱血した痕があちこち浮かび上がっている。「私は娼婦。二人のジジイどもの娼婦よ」、そう吐き捨てる林春花はわずか13歳の頃より八三幺で働き始め、実に多くの老兵たちの性的欲望をその身に受け止めてきた。軍中楽園とも呼ばれた八三幺の慰安所において性産業に従事していた女性たちは、貧困や借金の手形に両親から身売りされた女性や、刑務所の服役女囚、それに林春花のような山地原住民女性たちによって構成されていたという。

自身がそんな場所から「購入」された「もの」であることを自覚する林春花は酔った肢体を「私」へとしな垂れかけつつ、次のように囁く。

なんですって？

あいつらが私を愛してるですって？ ふん、なにが愛だっつてのよ。

あいつらは私にビビってるのよ。まるで病気を避けるように私と二人っきりになるのが怖いよ。

ねえ、わたしっていったいなにもの？ 先生、わたしってものかしら？ 楊じいさんはわたしを馬じいさんに贈るって、そうやってわたしから逃げてったのよ。そうして馬じいさんをわざわざ村の警察署まで行って引き戻してきたってわけ。でも馬じいさんは馬じいさんでわたしを楊じいさんに返すんだって。これってね……うう……ねえ、言ってよ。わたしって、いったい、なに、もの、なの、よ……¹⁵

物語の終局において、林春花はいつまで経っても馬楊林を息子として認知してくれない二人の老兵たちに見切りをつけ、自ら家に火をかけ山地へと戻ってしまう。結局二人の老兵たちが築こうとした「家族」はそうして妻であり、

また母でもある林春花からの絶縁状を受けて終焉を迎えてしまうのだった。

「家族」を形成したいという老兵たちの落地生根への希望は、しばしばこうしたより社会的、経済的な下位に置かれた女性たちの犠牲を要求するものであった。それは『莫じいさんの二度目の春』におけるような、異文化間の心温まるヒューマン・ストーリーという枠だけでは語りきれない。林春花を「もの」として「購入」しながら、彼女を妻であり、また母と看做そうとする二人の老兵たちの視点からは自らの境遇に対する不運や呪いの言葉はあっても、林春花の置かれたより絶望的な状況を想像することが出来ないのだ。

老兵たちのこうした家族への羨望や渴望といったものは、皮肉にも林春花のような原住民女性の犠牲の上に成り立っており、そしてそのことは日本植民地統治期から続く原住民女性たちへ向けられた性的身体の絶えざる供給という植民地主義的状况を再生産させる一環ともなっていたといえるだろう¹⁶。

(2) 擬人化される獣たち；張大春「鶏翎図」（1978）

履彊の『二人の父親』が、林春花という他者を家庭の中に引き入れることでその孤独を生め、家族を形成しようとしていたこととは対照的に、眷村¹⁷生まれの外省人二世作家である張大春は「鶏翎図」（1978）と呼ばれる作品において、徹底的に家族（他者）の不在を描くことでこの問題を浮き彫りにさせた。

輔仁大学在学中に「中国時報」誌上に発表されたこの「鶏翎図」という短編小説は、「老兵の人生の欠落を表現するだけにとどまらず、時代の暗部を描き出した」¹⁸ 作品として発表当時より各方面から高い評価を得、後に魔術的リアリズム作家として名をあげることとなる張大春の初期のリアリズム作品に属するものとされている¹⁹。

ある日、新たな部隊先に配属された小隊長の「私」は、駐屯地の近くにある防風林の中で部下たちが鶏を飼っていることを知る。部下たちの多くが小遣い稼ぎのために余暇や勤務外の時間を利用して鶏たちの世話をしているのに対して、蔡其実と呼ばれるこの老兵は30羽近い鶏たちにそれぞれ名前を付け、それらをまるで家族同然に可愛がっている。なかでも蔡其実が特に可愛がったのは真っ赤な鶏冠に黒い尾を持つ「大柱子」と呼ばれる1匹の雄の鶏。「私」は後に蔡其実との会話からそれが13歳の時に彼が故郷を離れる際の彼自身の幼名であったことを知る。蔡其実は防風林で飼育する鶏たちを離散によって失ってしまった家族に見立ててその喪失感を埋め合わせていたのだった。

蔡其実はゴム袋を放り投げて大股で一步前へ進み出ると、二楞子の首根っこを引っ掴んだ。「おめえ、肚が減りすぎてメクラにでもなっちゃったか。え？ こいつらはいったい誰だ？」彼は手を振って雛鳥たちを指差したが、雛鳥たちはそれに驚いて散り散りに逃げ去ってしまった。『黄花児』はおめえのムスメっ子、『珍珠』はおめえのヨメさんの妹でねえか。なんだ？ 知らないってか？ おら、どうやっておめえに教えただ？ 『虎でさえ我が子は食わぬ』だ。このロクデナシの大バカヤローめ！ ここは我が家だ。婆さんからもヨメさんの兄弟からも嫌われて、将来家を出た後いったい誰がおめえみてえなロクデナシの面倒を見てくれるってんだ？ 若いくせにしっかりしないか。この土匪め！ この……」²⁰

かつての自身を投影した「大柱子」に故郷の弟の姿を投影した「二楞子」、それにその娘に妻や姉妹たち。鶏たちと暮らすことで部隊の同僚たちからあからさまな嘲笑を浴びる蔡其実を、「私」はひどく気にかけ、また何度も彼の「家族」がいる家（鶏小屋）へと足を運ぶ。口を開けば故郷がどうしたとまくし立てる蔡其実は、防風林の中に彼だけの「家族」を形成し、その擬似家族の中での生活を送るのだった。

しかし「私」が蔡其実に部隊の防風林からの移動命令を伝えたことで、彼の「家族」はあっけなくその終焉を迎えることとなる。部隊の移動に際し、「私物」の携帯が禁止された兵隊たちは次々と飼育していた鶏たちを次々と鶏商人へと売りさばき始めるが、鶏たちを家族同然に扱う蔡其実はただ一人その交渉を行うことが出来ない。鶏1羽200元という法外な値段を主張する蔡其実を、本省人の鶏商人は台湾語で痛烈に罵り、蔡其実の鶏を買い取ることなくその場から立ち去ってしまう。そうして部隊の移動の直前、「私」は慌てふためいて士官室に飛び込んできた部下の一人から、彼が30数羽もの鶏たちを棍棒で一羽ずつ叩き殺している事を知って慌てて鶏小屋へと向かう。しかしそこでは既に鶏たちの屍骸に囲まれた蔡其実が最後の1羽に手をかけようとしていたのだった。

「なあ、まだ覚えてるか？」蔡其実は松の木に寄りかかると瞑想するように瞳を閉じた。その肘には「大柱子」が挟まれ、もう片方の手でしっかりとその首を押さえつけていた。蔡其実はまるで夢見心地といった様子で話を続けた。「家を出る時よ、おめえ、確か『二楞子』のやつと毬子²¹を奪い合って喧嘩してたっけな。おめえの父ちゃんはよ、おめえを吊るし上げて鞭でいやってほどおめえを叩いたっけなあ。なあ、大柱子。漢子ってのはなあ、金なんかには代えられはしねえもんなんだ。でもな、でも、もしそうじゃないっていうんなら……」再びボキンという鈍い音が周囲に響き渡った。私はとてもこれ以上見ては入れなかった。「命を以って償ったんだ！」彼は大きく嘆息すると、大柱子を穴の中へと投げ込んだ。²²

蔡其実が最後に手をかけた「大柱子」は、13歳の時に彼が故郷を離れる際の彼自身の幼名であり、鶏小屋を走り回る「大柱子」は幼き頃の彼自身の分身でもあった。自身の一生が兵隊として安く叩き売られ、家もなく、また孤独に暮らす中で、自らの分身である「大柱子」を殺すことによって蔡其実はなんとかかわずかばかり残った彼の自尊心を保とうとする。この「大柱子」とは故郷へとつながる蔡其実の過去そのものであり、またそれを自らの手で殺すことは彼にとって故郷からの二度目の「離郷」であり、そこへ到ることを放棄する「棄郷」の儀式でもあった。

故郷を想い、そしてまた家族を求める蔡其実は、しかし『二人の父親』における楊じいさんや馬じいさんたちと違って、現実に向き合うことなく（それゆえに他者の犠牲を求めることもなく）、彼自身の「家族」を形成する。しかしそこでは鶏たちを謂わば擬人化させることによってしか自らの望郷心や孤独を慰めることは出来ない²³。蔡其実にとって現実の生活はさしあたって重要ではなく、そのためたとえ同僚たちから自身の生活を笑いの種にされようが、粗野な話を吹っかけられようが、蔡其実は「ただうっすらと開いた口端から濁った金歯を覗かせるだけで、まるでそれは笑っているよう」にしか見えないのだ。

鶏たちと暮らす蔡其実にとって、重要なのは失われた過去とありえたかもしれない未来を鶏小屋という彼の「家庭」の中で想像することであり、そこには林春花のような他者が介入する余地はない。他者の「家庭」への侵入はむしろ「私」のそのように、彼の「家族」の存在を脅かしてしまうのだ。しかし部隊の移動という現実が彼の「家庭」や「家族」を否が応でも侵そうとする時、それらは現実の前に容易に押しつぶされてしまう。結局自らの手で鶏たちを絞め殺していった蔡其実は、現実を受け入れるために、あるいは家族という幻想を維持するために、鶏たちを丁寧に埋葬して弔った後に移動してゆく部隊のあとを追いかけてゆくのだった。

『二人の父親』も『鶏翎図』も、ともに異郷の地において親族を彼岸に失い、孤独に暮らす老兵たちの家族形成への試みとその挫折の物語である。離散者たちにとっての「家族」とは代え難いものであるゆえに、それへの代替は常に擬似的なものとならざるを得ない。その意味で楊じいさんと馬じいさんにとっての林春花も、蔡其実にとっての「大柱子」も本質的なところでは変わりはない。両者の違いはただ前者が老兵の孤独や望郷の念といったものが、林春花のような外部の人間へ対する無意識的な加害といったものへと転化するのに対して、後者では軍隊という閉ざされた空間の中で、老兵の孤独や望郷の念といったものがより鮮明に老兵個人の内面へと深く根を下ろされ、それがついには殺人（殺鶏？）へと至ってしまうという点であったといえるだろう。

また、この二つの老兵たちの異なったタイプの「家族」形成の試みとその挫折の物語は、二人の作家たち自身が置かれたポジションの違いをも鮮明に現している。本省人子弟としては早い時期から陸軍士官学校へと入学し、また20年近い軍隊生活を送ってきた履彊は、その経験から実に多くの老兵小説を描いてきた作家である。齊邦媛はこうした履彊の老兵に対する独特の見解が、台湾の郷土に対する深い愛情と老兵たちの心境への理解と同情の融合によって生まれたものだとして、退役後に老兵たちの身の上で起こる一連の悲喜劇が他の一般的な作品と違い、実に生き生きと描かれてきた事を指摘している²⁴。

しかしその一方で、履彊は老兵を決して一人称で描くことはなく、常に本省人子弟の主人公たちの視点からそれらを描こうとしてきた。このことは履彊がしばしば老兵文学の基調となってきたような高貴で栄光に満ちた老兵たちが異郷の地で没落していく哀愁と寂寞に満ちた姿ではなく、むしろその没落によって現地の人間たちに強いられる犠牲の姿を意識的に描こうとしていたためだといえるだろう。

履彊のこうした姿勢は後に描かれることとなる『兩岸』（1988）や『楊じいさんとその女』（1989）等の作品においても一貫した叙述スタイルであるといえる²⁵。

しかし、一方で外省人の二世世代である張大春が描いた老兵は、「私」という第三者から描かれてはいるものの、決して林春花のような犠牲を強いられる他者は登場しない。それどころか本省人の兵隊たちは誰もが皆、蔡其実をあからさまに嘲笑したり、彼に鶏を売ることを強要したりと、むしろ蔡其実を圧迫するような存在として描かれている。とりわけ游火曜と呼ばれる本省人の兵隊は、ことあるごとに蔡其実を笑いものにするような無情な上官として登場している。小遣い稼ぎのために自身が飼育していた鶏をなんの未練もなくすっかり売り払ってしまった游火曜は、部隊を訪れた本省人の鶏商人に向かって気ままに次のように放言してみせる。

「游班長。あと四籠もあれば足りるかね？」

「ああ、足りる、足りる！」游火曜は先ほど数え終わったばかりの紙幣を再び頭から数え直そうとしていた。そしてふと突然なかを思い出したように、「ああ、待て、待て。やっぱり六籠は必要だった」彼はぐると顔を振り向けると、その訳を私たちにこう釈明してみせた。「なんたってまだ蔡其実の一家が残っているからな」游火曜のその言葉に周囲からはドッと笑い声がどよめいた²⁶。

鶏たちで構成された「蔡其実の一家」に見られるような「奇観」は、戦乱と流氓に満ちた彼の半生が生み出した結果とも言えるが、しかし游火曜のような本省人兵士にとって、その「奇観」を主人公である「私」のように同情的な眼差しで眺めることは決して容易なことではない。そのため、鶏の売買をめぐる交渉が失敗した鶏商人が蔡其実に吐きかけた「キーシャオマ（このキチガイめ）！」といった罵声は、戦乱と流氓の経験を共有することのなかった本省人たちにとってはある意味で率直な感情でもあるのだ。

しかし蔡其実のような老兵を父の世代に持つ張大春にとって、游火曜がたびたび口端に浮かべる嘲笑や鶏商人の吐く罵声といったものは、本省人の下級老兵たちに対する無情と無理解の産物として映ってしまう。そのため同様に老兵の「奇観」を描いていても、そこには『二人の父親』における老兵たちのような無意識的加害者としての老兵よりも、むしろ圧倒的に無力で、現実との関わりをすっかり放棄してしまった蔡其実のような犠牲者としての老兵が描かれることとなるのだ。

この二つの作品は、同様に老兵たちの異郷の地における家族形成の試みと挫折を描きながら、作家たちの置かれた発話のポジションによって微妙な形でその相貌を変化させている。が、先に述べたように、究極的にはそれが代替不可能な存在として描かれている点では一致している。老兵たちの異郷の地における家族形成の試みは、それが常に代替物である限りにおいて失敗を繰り返さざるを得ない。しかし履彊や張大春のような老兵文学の担い手たちは、そうした家族形成の失敗を描くことで、老兵たちが抱える諸所の「奇観」や、それらが孕む離散者たちの嘆きの声を炙り出し、問題化してきたのだと言えるだろう。

4. おわりに

以上、本稿では1980年代前後を中心に、台湾における老兵文学の概要についての簡単な素描を描き出し、その上で履彊と張大春という二人の背景の異なる作家の作品を比較し、その表象の相違が持つ意味について言及してきた。

一貫して「家族」をそのテーマとして取上げてきた老兵文学は、その射程内に兩岸問題や原住民妻、あるいは蔡其実にみられるようなその孤独など、「家族」という離散者たちにとって代え難い、それでいてあくまで擬似的なそれを通じて様々な問題を提起し続けてきたと言えるが、こうした老兵文学という離散者たちの嘆きの声が「家族」というフィルターを通じて広がりを見せようとする時、それは必然的にその家族の一員であった二世世代の作家たち自身の問題へと引き継がれていくことになったといえるだろう。

このことは1980年代に興起了る老兵文学とほぼ同時期に眷村をテーマとした文学作品が数多く描かれ始めたことから窺える²⁷。老兵たちとその家族を安置するために台湾各地に設置された眷村は、離散者たちにとっての仮初の「家」を提供してきたが、台湾において成長した多くの二世世代の作家たちにとっては、眷村こそが彼らの「家」であり、「家族」の在り処であった。しかし1980年代前後から都市部より眷村がその姿を消し始めたことは、二世世代の作家たちにこうした「故郷」の喪失を意識させることとなった。そのため若い世代の作家たちが積極的に老

兵文学やその家族の不在を描いたことは、ある意味で自身の離散や漂流経験、また失われた家族へのノスタルジーであったといえるかもしれない。

例えば『鶏翎図』における蔡其実は、司令部より下された移動命令によってその「家族」との再度の離散を強要されるが、そのことは一度は軍の都合によって安置された眷村が、再度軍からの命令によって移住や解散を余儀なくされていた当時の眷村の状況とも重ねあわせて読み取ることも出来るだろう。鶏小屋とは蔡其実にとっての眷村であり、それは擬似的家族を形成していた蔡其実の心情と同様、張大春たち二世世代の作家たちにとっては擬似的な「家」や「故郷」を意味していたのだ。(一方、外省人の二世世代の作家たちが老兵文学から眷村文学へという軌跡を辿ったのに対し、本省人の郷土派作家であった履彊は1990年代以降からは政治家へと転身。台湾独立の急進派政党である台湾團結聯盟への参加を表明し、自らの「故郷」への回帰を果たしている)

戦災によって異郷の地への離散を余儀なくされた老兵たちの嘆きの声を描き続けてきた老兵文学は、こうして1980年代後半頃より徐々に眷村文学へと発展・展開していくこととなる。それはちょうど同時期に台湾社会の本土化が急速に進行していく中で、老兵たちの郷愁や懐旧に満ちた叙述方式がより同代的で反省的なものへと変貌していく必要性の中で生まれた転換だといってもいいだろう。そしてそれはまた離散や望郷という問題が解決されることなく次の世代まで形を変えて継承された証左であるともいえる。

老兵文学の発展とその後の展開は、その意味で離散によって生じた諸々の課題を二世世代の作家たちが如何に受け止め、またそれらを自らの問題として引き受け、思考していくための端緒でもあったともいえるだろう。

注

- 1 戦後初期、台湾における外省人人口に関する正確な統計は存在せず、国防部史政編集室は当時の軍籍在籍者の数はおおよそ60万人前後としている。(国防部史政編集室編『国軍眷村發展史』(2005年))その一方、李棟明は1947年から1955年までの人口増をおおよそ87万1000人程度と見ており、軍籍在籍者の数はおおよそ27万人程度(兵力規模と異なる)としている。李棟明「光復後台湾人口社会増加之探討」『台北文獻』第9-10合刊(1969年)224-226頁。李棟明「居台外省籍人口之組成与分布」『台北文獻』第11-12合刊(1970年)66頁。
- 2 周婉窈(浜島敦俊監訳)『図説台湾の歴史』(平凡社2007年)186頁。
- 3 笹川裕史・奥村哲『銃後の中国社会 日中戦争下の総動員と農村』(岩波書店2007年)
- 4 齊邦媛、王德威編『最後の黃埔 老兵與離散的故事』(麥田出版2004年)92頁。初出は「聯合報・聯合副刊」1996年4月14日・15日。
- 5 初出は「中国時報・人間副刊」1989年3月15日。
- 6 許俊雅「記憶與認同-台湾小説的二戰經驗書寫」李瑞騰『評論30家(下)』(九歌出版社2008年)484頁。
- 7 彭瑞金(中島利郎、澤井律之訳)『台湾新文学運動四〇年』(東方書店2006年)233頁。
- 8 ここでは唯一の本省人作家として、履彊の『老楊和他的女人(楊じいさんとその女)』(1989)が収録されている。
- 9 この点に関して、朱雙一は老兵文学における共通したテーマが期せずして老兵たちの婚姻問題であったことを指摘している。朱雙一『戦後台湾新世代文學』(揚智出版2002年)200頁。
- 10 初出は「聯合報・聯合副刊」1996年4月14日・15日。
- 11 リカラッ・アウー(魚住悦子訳)『台湾原住民文学選2 故郷に生きる』(草風館2003年)
- 12 日本においては、魚住悦子がリカラッ・アウーの原住民アイデンティティの視点からそれを触れている。「原住民族女性作家の誕生—リカラッ・アウーのアイデンティティー」山本春樹他編『台湾原住民族の現在』(草風社2004年)
- 13 履彊『履彊集』(前衛出版社1992年)132頁。
- 14 履彊、前掲『履彊集』138頁。
- 15 履彊、前掲『履彊集』143頁。
- 16 日本統治時代における原住民女性と内地人男性の性的関係に関しては、佐藤春夫の『霧社』、『魔鳥』などの作品群との関連から論じることが出来るだろう。
- 17 国民党の台湾移転に伴い、戦後台湾各地に設置された軍人とその家族を安置するための村落の総称。倉本知明「日本軍軍事施設から多文化的国民空間へ—三重市における空軍一村を中心に—」『Core Ethics vol.4』(2007年)。
- 18 彭瑞金「寫實文學的新原野 - 張大春<鶏翎圖>」『泥土的香味』(東大1980年4月)
- 19 1980年代以降、SF、歴史、武俠、政治、探偵、青春、魔術的リアリズムなど、その叙述方式や作風を常に変化させ、多岐に渡る著作活動を展開してきた張大春は、後に「張大春ショック」(司馬中原1989年)や「台湾文壇の寵児」(黃錦樹2000年)などといった数々の異名を取り、後進の作品や作家たちに大きな影響を与えてきた。しかし彼の著作活動において、『鶏翎図』のようなリアリズム志向の作

品は比較的少なく、わずかに初期の作品群のみに見られる傾向であるといえる。

20 張大春『最初』（時報出版社 2002 年）56 - 57 頁。

21 鶏の羽毛を編んで作った玩具。蹴鞠のように蹴り上げて遊ぶ。

22 張大春、前掲『最初』66 頁。

23 このような動物に対する擬人化は、履彊作品においても登場している。『楊じいさんとその女』において、人里離れた山地で暮らす楊じいさんは、山地における国王の如く振る舞い、そして彼が飼育する牛や羊たちは彼の忠実な臣下であり、また無敵の軍隊として描かれている。しかし動物たちの王である楊じいさんにも龔唾の原住民妻（王妃）がおり、そこではまがりなりにも「家族」が形成されている。

24 齊邦媛、前掲『霧漸漸散的時候』359 頁。

25 『兩岸』では主人公である李中杰は死の床に伏した義父江阜田の死を看取ることを拒絶し続けようとしており、また『楊じいさんとその女』においては、主人公の「私」の目から老兵である楊じいさんと妻である原住民女性の様子が語られている。

26 張大春、前掲『最初』58 頁。

27 実際、老兵文学の書き手たちの多くはその後の眷村文学の担い手ともなっている。張大春は後に眷村を舞台とした風刺小説『四喜憂國（四喜、国ヲ憂ウ）』（1988）を発表しているし、また朱天心の短編小説『想我眷村的兄弟們（眷村の兄弟たちよ）』（1992）などは老兵文学と眷村文学両全集に収録されている。

参考文献

日本語文献（年代順）

鍾理和他、（松浦恆雄他訳）『客家の女たち』（国書刊行会 2002 年）

リカラッ・アウー（魚住悦子訳）『台湾原住民文学選 2 故郷に生きる』（草風館 2003 年）

山本春樹他編『台湾原住民族の現在』（草風社 2004 年）

彭瑞金（中島利郎・澤井律之訳）『台湾新文学運動四〇年』（東方書店 2006 年）

周婉窈（浜島敦俊監訳）『図説台湾の歴史』（平凡社 2007 年）

笹川裕史・奥村哲『銃後の中国社会 日中戦争下の総動員と農村』（岩波書店 2007 年）

倉本知明「日本軍軍事施設から多文化的国民空間へ—三重市における空軍一村を中心に—」『Core Ethics vol.4』（2007 年）

中国語文献（年代順）

李棟明「光復後台湾人口社会増加之探討」『台北文献』第 9 - 10 合刊（1969 年）

「居台外省籍人口之組成与分布」『台北文献』第 11 - 12 合刊（1970 年）

彭瑞金「寫實文學の新原野 - 張大春<鷄翎圖>」『泥土の香味』（東大 1980 年 4 月）

苦苓『外省故郷』（希代書版公司 1988 年）

司馬中原「煉獄裡的天堂—兼序張大春の『歡喜賊』」張大春『歡喜賊』（皇冠出版社 1989 年）

履彊『履彊集』（前衛出版社 1992 年）

齊邦媛『霧漸漸散的時候—臺灣文學五十年』（九歌出版社 1998 年）

黃錦樹「謊言の技術與真理的技藝—書寫張大春之書寫」『書寫台灣』（麥田出版社 2000 年）

王德威『衆聲喧嘩以後 點評當代中文小說』（麥田出版 2001 年）

張大春『張大春作品集 最初』（時報出版社 2002）

『張大春作品集 四喜憂國』（時報出版社 2002）

朱雙一『戦後台湾新世代文學論』（揚智出版 2002）

齊邦媛、王德威『最後の黃埔 老兵與離散的故事』（麥田出版 2004 年）

蘇偉貞『臺灣眷村小説選』（二魚文化 2004 年）

国防部史政編集室編『国軍眷村發展史』（国防部史政編集室 2005 年）

履彊『老楊和他的女人』（聯合文學 2006 年）

李瑞騰『評論 30 家（下）』（九歌出版社 2008 年）

映像資料

李祐寧（監督）、呉念真（脚本）『老莫的第二個春天』（東森電視台 1984 年）

The Representation of Family in Military Literature: Focusing on Comparing Lu Jiang's and Zhang DaChun's Literary Works

KURAMOTO Tomoaki

Abstract:

This thesis focuses on the representation of the family in military literature to clarify the historical background and position in society of veteran soldiers in Taiwan.

To indicate the context of the formation of military literature in Taiwan, this research is based on historical materials and literary texts. As for literary texts, the works of two authors with different backgrounds, Lu Jiang and Zhang Dachun, are compared and contrasted.

While the Taiwanese author, Lu Jiang, aims to depict veteran soldiers as assailants of women in the making of a family, the mainland author, Zhang Dachun, tries to depict the loneliness and wretchedness of veteran soldiers in his work. Although the making of a family may seem different in their works, they share a few common points. In both works, the veteran soldiers tend to view the family they have right now as a substitute for the family they lost in the past, and the making of their families eventually meets with failure.

By depicting the veteran soldiers' attempts to form a family and their setbacks in the process, these works of military literature aim to record the lives of marginalized veteran soldiers in Taiwan society in the 1980s.

Keywords: military literature, family, diaspora, Lu Jiang, Zhang Dachun

